

たしかにたましひで宇宙を包む事も出来る。

僕は無想庵に宛て、電流のような逸さで、ハガキを一枚一枚書き飛ばした。

何を書いたか覚えて居ない。書いた文字の上へ矢鱈に書きなぐつた。

万年筆の先が折れる程力を入れて、

自分の生の終焉を、ドロドロの赤銅色で色どつても構はない事だ。

極度の絶望と、ダ、の道場を此の邊りに一つ建立しようと目論むような妄想とが交々起り初めた。

女中が膳を運んで、めしをよそつてくれる。

ポロ／＼涙が出て来た。

アアア死ぬるんだ死ぬるんだ。女にフラレるんだ。

僕は箸をかみしめながら泣き出した。

女中は心配してあつけにとられて、やさしそうな事を言つたりした。

めしをのどへ嗚咽と共にヒツソンで何杯も食べた。